

【註(I-3)】

1) ‘Di Messer Giovanbattista Ramusio prefazione sopra il principio del libro dei magnifico messer Marco Polo, All'eccelesse messer Ieronimo Fracastoro’, ed. Milanese, vol. 3, pp. 21-35. ミラネージ版テキストは、[I-17] *Navigazioni e Viaggi*, Venice 1563-1606, 3 vols, Amsterdam, 1970-71 の覆刻であり、各巻それぞれ 1563, 1583, 1606 年版が用いられている。したがって、ラムージョの「序文」の収められている第二巻は第三版のもので、初版 1559 年版は Moule pp. 577-89 に覆刻されている。ユールには、マルコの伝記に関する部分を主とする抄訳がある (vol. 1, pp. 2-8. 底版は明記されていないが第二版以降のものともみられる)。初版と第二版以降ではテキストに若干の異同があり、ムール版の脚注にその対校が見られる。拙訳では、< >に初版のもの、≪ ≫に第三版のものを示した。単なる語句の言い換えや綴り・句読点が異なる場合は、ミラネージ版に依った。人名・地名は、慣用的に定着しているもの以外ラムージョのイタリア語読みにしたがう (以下同)。[] 内は訳者註 (以下同)。

2) フラカストロ: 註 1-4 参照。

3) 『オデュッセイアー』冒頭の箇所 (I. 1-4): 「あの男の話をしてくれ、詩の女神よ、術策に富み、トロイアの聖い域市を / 攻め陥してから、ずいぶん諸方を彷徨って来た男のこゝを。 / また数多くの国人の町々をたずね、その気質も識り分け、 / ことさらに海の上ではたいへんな苦悩をおのが胸中に咬みしめもした。」(呉茂一訳、岩波文庫、1987、上、p. 11)

4) モーリタニア王ジウバ *Giuba re di Mauritania* (?-ca. 23): ヌミディア王の子として生まれたが、前 46 年幼くして捕虜となり、ローマに送られる。そこで教育を受けてアウグストゥスの知遇を得、メディア王に復位し、後にモーリタニア王となる。そのアフリカ記は、大西洋上に島々が存在することをローマ人に教えたが、今に伝わらない。

5) カスピ海については、プリニウス (ca. 23-79) が海峡によって北のスキタイ洋につながるとする (中野定雄他訳『プリニウス博物誌』雄山閣、昭和 61、1, pp. 254-5) のに對して、プトレマイオス (138-180) は北方も限られた湖とする (中務哲郎訳『プトレマイオス地理学』東海大学出版会、1989、p. 107)。また、プトレマイオスの地図では北は 63 度で途切れ、それ以北は不明。南は 15 度辺りから未知の大陸が始まる (同、pp. 210-11)。

6) マルコが少年時代にどのような教育を受けたかについても説が分かれる。バルデッ

リ・ボーニが、父の留守中読み書き算盤以外たいした教育は受けなかつたろうとし (Baldelli Boni p. iv)、オルシュキも、普通の少年として育てられ商人としての教育や訓練は受けなかつたとする (Olschki pp. 97-8) のに対して、ガッロは、当時のヴェネツィアの貴族階級にふさわしい教育を施され、ラテン語や簿記も知つていただろうと見 (Gallo pp. 127-9)、ボルランディも、たとえ貴族であれ家業である商売の手ほどきを受けなかつたとは考えられないとする。とりわけ父と叔父が第一次旅行から帰ってヴェネツィアにいた二年間 (1269-70) には、次の旅行に備えて大いに鍛えられたことが想像される (Borlandi pp.140-1)。

ついでながら、マルコが書の中であれほど元朝の富と文明を詳述し賞賛しているにもかかわらず、ラムージョがそのタルタル人の国を「未開」*rozza* としている点も注目される。

7) ホアン・デ・バロス *Jiao de Baros* (1496-1570) : 貴族の家柄に生まれ、ポルトガル宮廷で人文主義教育を受ける。1525年よりインディア館に勤務し、後に官廷付公式修史官となる。大著『アジア』(1552-1615)は、ポルトガル人のアジア発見征服の歴史を綴ったもの。そのうち『地理学』とは、第一編(1352)最初の十巻の「航海」の一部をなすべき世界地理の記述であるが、今に残っていない。主としてインディア館所蔵の文書を利用したと見られ、その中に漢文で書かれた「中国の地理書」のあったことが知られる。ラムージョはバロスと個人的に交信があり、様々な知識や情報を直接得たものと考えられ、第一巻の最後にその一部を収録している : *Della istoria del signor Giovan del Barros* ', Milanese, vol. 2, pp. 1043-85。第一編の III-8, IV-7, VIII-4, X-1, 2 を収める。Cf. ホアン・デ・バロス (生田・池上訳 : 『アジア史』一、二、岩波書店、1980-81 (第二編十巻の訳)。

8) 少しく混乱しているが、バロスの上記箇所と同様な文章がみられる (pp. 1073-4)。が、バロスの言うキンサイは天津のことで、それをラムージョがマルコのキンサイと誤ったもの。また実際は、広東は北緯 23 度、杭州 (キンサイ) は 30 度付近。その書を基に作成したという巻末地図 (Milanese vol. 1) 参照。

9) この箇所もテキスト研究史上注目される。ユール (p. 3) とムール (p. 45) では訳に若干の違いが見られ、ベネデットも問題にしている (Benedetto, p. 20)。ベネデットはここを、ひどく崩れた形で出回っていたヴェネツィア語写本 VB を、より優れたラテン語版 Z でもって訂正することを意味すると見る (Benedetto p. clviii) (後註 45 参照)。

10) 政治に触れている数少ない箇所であるが、せつかく新大陸で得られた富がヨーロッパでのキリスト教君主間の争いで浪費されることを憂慮しているわけであり、ヨーロッパ人によるその征服や富の獲得は素直に肯定している点（本「序文」の最後にも窺える）、征服者の横暴を批判・告発した同時代のラス・カサス（1474-1564）の姿勢は見られない（cf.『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』岩波文庫）。

11) ヘルナン・コルテス Hernan Cortes（1484-1574）：1518年ヴェラスケスの第3回航海の指揮者。1519-1521年にメキシコ・アステカを征服。国王カルロス五世に宛てた五つの報告書簡がある。ムテズマ王のメキシコのクルア（クルア・メシカ=アステカ国王）の主部テミスティタンについては、「大きな湖の上に驚くべき技術によって建設されている」とある。Cf. コルテス(伊藤昌輝訳)「報告書簡」『征服者と新世界』岩波書店、1980、pp. 113-434（第二、第三書簡を取める）。

12) マルコ・ポーロとコロンブスを比較した嚆矢であり、その後も格好のテーマとして繰り返し持ちだされる。ユールは、その旅と経験のスケールの大きさではマルコの方が優るとしながら、人類の文明にとってはコロンブスの企てをより意義深いものと考え、また例によって、コロンブスの発見は「新世界に光明を与える摂理の一環をなしている」と言う（vol. I, pp. 104-7）。こうした捉え方は、19世紀のユールに止まらず今なお続いており、例えば、「彼がそれ〔マルコの書〕を読んで刺激を受けていなければ、またトスカネッリその人の、地球の実際の大きさを計算するに当たっての摂理による誤りがなければ、…アメリカの人々は、発見してもらうのに一体まだどれくらい待たなければならなかったことだろう」（Allulli, 1954, p. 107）。他にも Almagia (p. 35), Benedetto (p. 81), Gallo (p. 150)など。

13) ポーロの後も東方に赴いた多くの商人のあったことが知られる。例えばガッロに、モンテコルヴィーノ、オドリコ等の宗教家以外に商人だけでもマルコの帰国以前に一人(1281年ヴェネツィア商人 Pietro Lucalongo、北京でモンテコルヴィーノに教会建設のための土地を提供したことで知られる)、帰国以後1449年までに、記録に残っているだけでも二十人以上の、インドもくしは中国に渡ったイタリア商人のリストが挙げられている（Gallo pp.146-50）。 Cf. Yule-Cordier, *Cathay and the way thither*, Nendelin Liechtenstein, Kraus Reprint, 1967 (1913-6); R. S. Lopez, 'I successori di Marco Polo e la febbre della seta', in [III-11], pp. 289-91; M. Della Rocca, 'Sulle orme di Marco Polo', in [III-1], pp. 120-2; オドリコ(家入敏光訳)『東洋旅行記』桃源社, 1965; 佐口透編『モ

ンゴル帝国と西洋』, 平凡社, 1980 (1970)。

14) アビルファダ・イスマイル Abu'l-Fida Isma'il ('Imad al-Din) (1273-1331):エジプトのスルタンに仕えた科学者・歴史家。その書 *Taqwim al-buldan* (『経緯度による諸国の定位』 *Determinazione dei paesi in latitudine e longitudine*, 1321) は、アラビア人学者やプトレマイオスの地理書を要約して諸国一覧 (28カ国) にしたもの。西洋には17世紀に部分的に紹介された。フランス語訳 *Geographie d'Aboulfeda*, par Reinaud et St Guyard, 3 vols, Paris, 1848-83 がある (Milanesi p. 24)。ガッロはその中国に関する章 (vol. 3, pp. 122-5) を引用し、その記述が短く不正確でマルコとは較べものにならないことを示し、マルコの書がとれほど「偉大な科学的重要性」を有していたかを強調している (Gallo pp. 150-2, 164-7)。

15) Avicenna, *Kanun fi l-tibb*, 『医学原理』第二巻。

16) 「アットゥアル」 *Attual* は今は伝わらない論著の題名、「カノン」 *Canonn* は al-Biurni の *Kitab al Kanun al-Masudi* (10世紀)、「ベンシディオ」は *Kitab al-Djughrafiya* の著者 Ibn Sa'id al-Maghribi (13世紀)、「レスム」 *Resum* は al Kindi の *Rasm al-ma 'mur min al-ard* (9世紀)、「クシロ」 *Cusiro* は同定されない (Milanesi p. 25)。

17) アビルファダの用いた経度は、今日のグリーンニッチ基準より西に5度偏っているとのこと。プトレマイオスは、西経15度付近にあるカナリア諸島を基点としており、事実その差は約10度となる。が、実際はアフリカの西端とほぼ重なる。

18) 実際は、ソルダイアもカッフア同様クリミア半島南岸にある。

19) 実際は、サライ (アッサラ) はカスピ海に注ぐヴォルガ河畔、タナ (アザク) はアゾフ海に注ぐドン河口にあり、この混乱は両河を同一視したため。

20) 「アルメニア王の親戚にあたるクルキ殿の子息たりしハイトン・アルメーノ殿の歴史第二部」 'Parte seconda dell'istoria del signor Hayton, Armeno, che fu figliuolo del signor Curchi, parente del re d'Armenia', Milanesi, vol. 3, pp. 299-355 (クルキは、ハイトンの父の名ではなく、キリキア地方にあったその領邦コリコ Corico の地名、現コルゴズ Korgoz)。数種の写本が伝えられるが、ラムージョが用いたのは *Novus Orbis* (註2-3参照) 所収のラテン語版。第二部はタタールの歴史に当てられ、原文フランス語版では第三巻にあたる (*La flor des estoires de la terre d'orient*, ed. Charles Kohler, Paris, 1906, Libre III, pp. 147-219)。

21) この混乱もタナとサライ、あるいはドンとヴォルガを混同したため。

22) ラムージョによるとマルコのチグリス川とはアム・ダリア川ということになるが、それがヴォルガ河にあたることはポーチェによって初めて指摘された。上記の混乱はすべてこのチグリス河という名に惑わされたものであろう。

23) ハイトンによれば、オゴタイ・カーンの息子は Iochi (ジウチ)、Baydo (バトゥ)、Chagoday (チャガタイ) の三人 (ed, Milanesi p. 318)。実際は、ジウチとチャガタイはチンギスの息子でオゴタイの兄弟、バトゥはジウチの息子。ラムージョの言うソドキが誰に当たるか不明だが後継者がベルケであることなどからすると、ジウチのことか (id. pp. 320-2)。

24) アヴィケンナ (980-1037) の祖国とされるブハーラは、実際は東経 64 度 25 分、北緯 34 度 48 分。

25) イル・プラティナ Il Platina と通称される人文主義者バルトロメオ・サッキ『クリストならびに全教皇の生涯の書』Bartolomeo Sacchi, *Liver de vita Christi ac omnium pontificum*, 1474。

26) どこから出港したとは明記されていないが、今ではザイトン泉州からというのが定説となっている。

27) 以上からするとラムージョは、ガイハトゥの在所をインダス川上流とし、ポーロはインドで下船してまずその官廷に至り、次いでペルシア国境ツノカイン地方のカザンのもとまで王妃を伴い、再びインドに戻って乗船、ホルムスにて下船し、そしてペルシアを横断してトレビゾンダに至った、と考えているようである。が実際は、中国からホルムスにまで至り、そこで下船してダフリーズのガイハトゥの居所にまで来たり、そこから東行して王妃をカザンのもとに伴い、再びガイハトゥの元に戻ってのち出立し、トレビゾンダに至った。

28) 帰路のこのルートのうちトレビゾンダとコンスタンチノーブルは不思議でないとして、なぜネグロポンテ (ギリシア東岸の現エビア Euboea 島) に寄ったのか、あるいはマルコがわざわざその名を挙げているのかが問題になるが、ヴェネツィアの植民地であり寄港地であったこととは別に、1343 年 1 月 1 日付のヤコベッロ Jacobello (マルコの腹違いの弟ステーファノ Stefano の息子) の記録に、そこにポーロ家の支店があったことが見える (Gallo p.77、記録は Orlandini d. 48, pp. 43-4)。それがいつ購入されたものであるか定かではないが、マルコより前の代からのものであった可能性は高い。

29) 旅行中も中国滞在中も父・叔父とはほとんどいつも行動を共にしていたことであ

ろうし、旅行中のメモやルスティケッロへの口頭での説明もおそらくヴェネツィア方言でなされたとみられることからして、忘れてしまったとは考えにくい。

30) 老マルコは、1280年の遺言状 (Moule d. 1, pp. 523-5) ではニコロの二番目の妻トレヴィザン Trevisan と共にサンセヴェーロ San Severo 区に住んでおり、一方1300年の若マッテオ (マルコの腹違いの弟) の遺言状 (Moule d. 2, pp. 525-8) の住所がサン・ジョヴァンニ・クリソストモとなっていことからして、カ・ポーロとして知られるその家が購入されたのは1280年以後1300年以前ということになるが、1310年の叔父マッテオの遺言状 (Moule d. 6, pp. 529-36) に見られるその家の所有権の分割では、計24カットのうち老マルコ (すでに死亡のためその息子若ニコロ) の相続分4.5に対して、ニコロ (すでに死亡のためその相続人マルコ) とマッテオがそれぞれ9.25となっており、この割合いからして、かの家の購入には二人も加わったとみられる (彼らの方が多いのは東方から持ち帰った富を当てたためと推測される)。したがって購入は、1295年の帰還後のこととなる。とすると二人が帰ってきたときには、ポーロ家はまだ別の所、おそらくサン・セヴェーロ区にあった可能性が高い (Gallo pp. 95-6; Orlandini pp. 7-8)。ラムージョと同時代の年代記作者マルコ・バルバロ 『ヴェネト貴族家系譜』 Marco Barbaro, *Genealogie nobili venete* にも、「持ち帰った宝石で当時にすれば素晴らしく美しい館をサン・ジョヴァンニ・グリソストモ区に建てさせた」とある (Gallo pp. 85-6)。ガッロは、マルコの腹違いの弟マッテオの住所が以前はサンタ・クローチェであったのが、1296.11.11~1297.11.10の大議会議員名簿ではすでにサン・ジョヴァンニ・クリソストモのあるカンナレージョ Cannaregio 区となっているところから、購入はそれ以前帰国後さほど経ぬ時期とみる (Gallo p.317, d, XXII, p. 325)。なおサン・ジョヴァンニ・クリソストモは、カナル・クランデ (大運河) 沿いの右岸、リアルト橋を渡って左へ二つ目、市の商業中心地区。

31) その後、家はほとんどマルコの、その死後は妻と三人の娘のものとなるが、世代が代わるにしたがってさらに細分化され、その所有権をめぐる争いが繰り返されることが記録に跡づけられる。そして、ラムージョの言うようにかつては大きく美しかった同館も、16世紀半頃には老朽化し、多くの小さなアパートに分かれ、貧しい職人の家族たちの住むところになっていたと言われる。その後1596年の大火で焼失、1678年その跡に劇場 (Grimani) が建設され、後に改築されて当時の著名な歌手の名を取ってマリブラン Malibran 劇場と名付けられ今に至っている。ラムージョの言う「ミッリオニの庭」

Corte del Minoni とは同劇場の土間の位置に当り、現在そう呼ばれている所は少しはずれた別の場所になる (Gallo pp. 96-106)。

32) 1280 年の遺言状で老マルコは二人の弟ニコロとマッテオを遺産受託人に指名しており、二人の不在を一時的なものと考え、その帰国を確信していたと見られる。1261-69 年の第 1 回旅行から帰国後、次の旅行に出発する前に、二人は新たな商売の可能性や政治・宗教情勢を充分検討したであろうし、また当時の東方交易商人にとって長期の不在は特別なものではなく、ヴェネツィアに残る家族たちには、少なくともトレヴィゾンダ到着以降は兄弟商会や商人仲間を通じて、なんらかの情報が伝わっていたものと想像される (Orlandini pp. 9-12, Zorzi pp. 286-90)。同遺言状には、息子ニコロと娘マロカがソルダイアに残ったことが記されており、マロカは当時夫と共にまだそこに住んでいた。またコンスタンチノーブルには、1310 年のマッテオの遺言状によると、いとこ Mabilia (Manibilia) が住んでおり、彼らのかつての家がまだ残っていた可能性もある。東方に往来する宗教家や商人たちの間での連絡報連絡網が当時すでにどれほど密であったかは、一昔前のカルピニヤルブルクの旅行記にもうかがえる (cf. カルピニ・ルブルク (護雅夫訳) 『中央アジア・蒙古旅行記』, 光風社出版、1989)。

33) ポーロ家の子孫はその後も引き続き同館に住んでおり (その所有権をめぐる争いは 1582 年の記録にまで見られる (Orlandini pp. 10-12)、ラムージョの言う、近所に自宅を持つ元老院議員ガスパロ・マリピエロ Gasparo Malipiero が 1553 年当時非常な高齢であったとすれば、その子供の頃つまり千四百年代の後半に、あるいはその父や祖父がそれより前に、ポーロ家の子孫から直接話を聞いた可能性は極めて高い。後のポーロ家の系譜に関する説明のところでラムージョ自身、古記録の真偽をその子孫に直接確かめたといっている。が、続いて描かれているごとき情景が事実であったか否かは確認されない。同地区の見取り図は Orlandini tavv. I-VI ; Moule p. 36。

34) 三人が東方から奴隸 (下僕) を連れ帰ったことは記録に見え、1310 年の遺言状でマッテオは兄ニコロとともに彼ら (複数男女) を開放したことを述べている (Orlandini p. 13, n.4; d. 6, pp. 28-9)。マルコも遺言状で「タルタル人種の我が奴僕ペトルス」petrum famulum meum de genere tartarorum を開放することを誓っている (資料 5)。こうした光景が本当にあったか否かはさておき、ここに登場する召使というのが彼らであった可能性は高い。ただ、彼らがなに人であったか、中国から直接伴ったものか途中インドやペルシアや黒海沿岸で買い入れたものかは分からない (Yule d. 8, p. 514; Pauthier p.

xx; Moule d.18, pp. 539-40)。マルコの解放奴隷ピエトロは、1326年の記録に「サンタ・マリーア・フォルモーサの住人ペトルス」*Petrus l'Indegus da Santa Maria Formosa*として登場し（Gallo pp. 310-11）、1328. 4. 7にはヴェネツィア市民種を認められたことが確認される（Yule p. 134; Orlandini d. 23, p. 37）。

35) 三人が東方から宝石・絹・織物・特産物など、多くの高価な品々を持ち帰ったことは、長女ファンティーナによる父マルコの遺品目録に窺える（Orlandini d.19, pp. 56-67; Moule d. 69, pp. 554-8）。

36) ポーロが東方から持ち帰った富、あるいはマルコの財産に関しては評価が別れる。前註遺産目録よりムールは1924年の時価に換算して約3000スターリングポンドの値を得、相当な額であっても百万長者とは言えないとする（Moule pp. 30-1）。オルシュキも驚くほど少ないと見る（Olschki p. 102）のに対して、ガッロはマルコの遺産目録や娘たちの持参金からさらに詳細に計算して、金72.016kg, 9835スターリング金貨の値を得、これを当時の他の資料に見られる例と比較すれば破格の財産だとする（Gallo pp. 111-5）。これをさらにゾルジは、1981年4月当時の金に換算して約12億3400万リラ（約1億5千万円）の値を得、裕福であっても伝説に語られるほどではないと言う（Zorzi p. 37, Zorzi¹ p. 342）。一方ボルランディは、二人が東方から持ち帰った富は莫大なものであったろうが、帰路トレビゾンダで没収されたためと、再び出掛けた東方貿易（その資金を負担するが途次マルコが捕虜となる：後註40参照）の失敗によりあらたか失われたものであり、でなければ後の細々とした商売や金貸しの説明がつかないという（Borlandi p. 140）。

37) 現在に伝わる記録ではすべて老マルコ、ニコロ、マッテオ（あるいはマッフィオ *Maffio*）の順であることが確認されている。また、彼らのいずれも公職に付いた形跡はない。ニコロの子でマルコの弟マッテオは1295年大議会議員に選ばれており、それと混同された可能性が高い（Gallo p. 315, n. 2）。マルコリーノも1340年来権威の高い公職に就いている（Orlandini p. 69; Gallo p. 313）。

38) 「ミッリオーニ」*Millioni*なるあだ名の由来については諸説あり、まず最初が14世紀前半ヤコボ・ダクィの、「その富が何百万リブラに値した」からという百万長者説（資料4）。マルコ・バルバロにも、彼ら三人は「人々からカ・ミッリオンの者と呼ばれた。噂によると彼らは宝石を百万ドゥカーティに値するほど有していたからである。この呼び名は1566年の今に至るまでその館に残っている」とある（Gallo p. 86）。その他、

Sansovino (1581), Apostolo Zen (1753)らにも同様な記事が見られるとのこと。次がこのラムージョの、マルコの語るグラン・カーンの富の単位に求める説である。今世紀に入ってオルランディーニは、それが使われたのはマルコと父ニコロに対してだけで、ポーロ家の他の家族と区別するために用いられたのであり、「驚異の物語の作者」という意味で、何か皮肉やからかいの意図が込められているとした(Orlandini pp. 11-2)。これに対してベネデットは、公文書でも使われているところから、だれか先祖や親戚の者の名前エミリオ(ーネ) Emlio(ne)に由来、その語頭母音 E が脱落したもので、かのポーロ家を他の多くの同姓から区別するために使われたのであり、皮肉や揶揄的なところは少しもないとする (Benedetto³)。さらに近年ガッロは、ヴェネツィアに古くから様々な形で記録に見えるヴィリオーニ Vilioni 姓の一異形で、当時東方貿易に活躍していた Vilioni 家と関係があるのではないかとの新説を呈している。同姓の例としては、1264年タブリーズでの遺言状が残る Pietro Viglioni、1951年中国で発掘された墓碑にその名がみえる Caterina Vilioni (ジェノヴァ商人 Antonio Vilioni の娘とする説もある :Zorzi p.349) などが知られる。そして、老マルコはそのピエトロ・ヴィリオーニの商会の一員であり、サン・ジョヴァンニ・クリソストモの館はかつてヴィリオーニ家のだったのを譲り受けたもので、同カンナレージョ区の他のポーロ家と区別するために「カ・ミリオン」と呼ばれていたのではないかと推理している。また、老マルコや父ニコロのみならず、1342年の公文書では老マルコの子ニコロにも Polo の代わりに Milioni が使われていることからして、これはあだ名ではなく、またマルコの旅や書とも関係なく、本来の姓であるとしている (Gallo pp. 313-5)。これに対してゾルジは、ベネデットの説を支持しながらも、当時は多くの同姓を区別するためにあだ名をつけて呼ぶ風習があり、それがグラン・カーンやカタイの単位を示すのであれ、持ち帰った富の大きさを言うのであれ、信じ難い話を意味するのであれ、「ミリオーニ」という当時まだ耳慣れぬ言葉がそのために用いられても不思議でないとする (Zorzi pp. 341-4)。

39) ラムージョが見たという公文書がどれを指すのか不明だが、「ミッリオーニ」の現れる文書はいくつか確認されている。例えば、ユールによって紹介された 1305.4.10 の大議会裁決に、<nobiles viri… marcus paulus milion>とある (Yule vol. 1, p. 6, vol. 2, p. 511; Moule d. 4, pp. 528-9)。ただし、従来これは旅行家マルコのことと考えられてきたが、その箇所の下に<mortus> (死亡) と書き込みのあるところから (この事実は Yule p. 68 にも指摘されている)、ガッロはこれを叔父の老マルコのこととする。老マルコは、

1300年のニコロの子マッテオの遺言状にその名が挙げられていないことからして、それ以前に死亡したと考えられていたが、ガッロはこの事実により、その死を1305年と1309年の間と考える（Gallo pp. 89-92）。もう一つは、1324.7.23のNicolaus Paolinuの遺言状の、<ser nicolai paulo dicti milion lo grando>であり、これは父ニコロのこととされてきたが、彼は24年以上前に死亡していることから、老マルコの子ニコロの可能性もあると考える（ibid.）。ガッロはもう一つ、1324.9.25の四十人委員会の判決で、そのニコロの子マルコ、つまりマルコリーノ Marcolinoがドージェの顧問として<Marcus Milioni>なる名で記載され、姓の代わりに用いられている新資料を提出している（Gallo pp. 312-3, d. XX, pp. 324-5）。

40) マルコの投獄をクルツォラの海戦に求めるラムージョ説は、早くからほとんどすべての研究者によって疑問視あるいは否定される（例えばバルトリに最も詳しい:Bartoli pp. 10-18）。詳細は省略するが、要するに、同海戦に関する当時のあるいは後世の記録・文献にマルコの名が一切登場しないことと、1298.9.8のその戦いの日（ジェノヴァ着はYuleによれば同10.16, Galloによれば9.26）から、翌年夏から秋に解放される（両都市間の講和は1299.5.25、捕虜の解放は8.28）までの一年足らずでかの書を完成させるのは（その間にルスティケッロと知り合い、ヴェネツィアからメモを取り寄せなければならない）、いくら何でも無理ではあるまいか、というものである。一方、ヤコポ・ダックイのライアス海戦説も、それが1294.6.2でポーロの帰還1295年より前であることから、これもあり得ないが、その記事にボニファキウス八世在位当時とあるところから（資料4）、1296年頃当時頻りに衝突していたジェノヴァに、地中海東部のどこかの海、多分ライアス沖で捕まったもので（Orlandiniは一例として1296年Giovanni Soranzoがカッフアに攻撃を仕掛けた事実を挙げている:p. 14）、それをラムージョが勝手に最も有名なクルツォラ海戦に結び付けたと推定される（Yule pp. 53-5; Benedetto pp. Cxciv-v; Moule pp. 34-5; Zorzi pp. 28-9 etc.）。これに対してAlmagiaはラムージョ説を積極的に支持する（p. 25）。

ではどうした経緯で捕まったのかについても諸説があり、再び東方貿易に出掛ける途中だったとする説（Zorzi p. 29）、帰路トレビゾンダでコムネノス政府により没収された財産を取り戻しに行くところだったと説（Olschki p. 101, n. 16に紹介）、記録には残らぬある武装商船隊同士の衝突にてとする説（Moule p. 35）、商人としてではなく貴族として祖国の防衛とレヴァントとアドリア海の交易権保護のための戦いにてとする説

(Olschki pp. 101-2。商人性を否定するこの説には批判が多い：Zorzi p. 28; Borlandi 136-40)、などである。この点に関しても最も明快なのはボルランディで、彼もラムージョ説は退け、同時代人ヤコポ・ダックイの記事（資料4参照）に信を置き、それがヴェツィアとジェノヴァの商船隊同士の衝突であり、またマルコに<dominus>とあるところから、その商船隊は当時優勢だったジェノヴァ対して東方貿易の活路を開くべくヴェネツィア当局あるいは商人仲間が組織し派遣したものであり、帰国したばかりだったマルコが、東方交易に通じたまさに打ってつけの人材として請われて、あるいは自らその「長」として乗り組んでいたところだったとする（Borlandi pp. 134-40）。

41) ジェノヴァにおけるマルコを記録する文書は何一つ発見されていず、その獄で彼がどのように扱われたか一切分からないが、ジェノヴァ側の被害も大きく、捕虜の数も数千を越え、当時貴族たちは身の代金目当てに比較的丁重に扱われたと言われており、マルコが獄中でルスティケッロと知り合ったり（なぜそれが可能だったかは不明）、その協力を得て旅行記を編む等の自由を許されたとすれば、そうした事情も関係していると推定される。その話を聴くため町中が押し掛けたというのは誇張の匂いが強い。

42) ジェノヴァの獄でピーサの騎士物語作家ルスティケッロとの共同作業がどのように進められたかも全く記録なく推測する他ないが、かつてのバルトリ、ポーチェ等の、マルコが口述するがままにルスティケッロが書き取りフランス語に訳したとの説は廃れ、なんらかのメモやノートに頼ったとする説が、とりわけベネデット以来一般化している。また、そのメモやノートは商業的あるいは記録的性格のものだったのが、ルスティケッロの手を経ることによって文学的・物語的性格のものに変わっていった、とみる点でもほぼ一致している。ただその場合、そのメモやノートの完成度をどの程度のものとするか、その作業におけるルスティケッロの役割をどのように評価するか、つまりマルコの草稿とルスティケッロの原稿の異なり（隔たり）をどの程度のものとするかとなると、諸家の間で微妙に違って来る。ルスティケッロはそれをただフランス語に移し替えたにすぎないと、マルコの独自性を重視する見方から、それに基づいてルスティケッロが一つの物語に纏め上げた、と、後者の役割を重視する見方まで、研究者によって様々なヴァリエーションがある。

前者の代表がベネデットで、「唯一の真の著者」はマルコ独りであり、彼がほとんど用意した草稿にルスティケッロはつなぎの語句や会話文や戦闘の情景を付け加えただけで、その役割は、長期の不在のため西洋の何語も自由に操れなくなっていたマルコに代わっ

て、原稿をフランス語に置き換えただけとする (Benedetto pp. lxxxiii-iv および資料 6 参照)。ただしこの点に関するベネデットの論は 1928 年から 1953 年の間で微妙に揺れている)。一方、伝説や推測を全て退け記録に立証されるもののみに基づくオルランディーニは、三人の東方行は全く商業目的のものであり、そのメモやノートに記されていたのも当時の東方商人にとっては特に驚くべき事柄ではなく、口伝えにはよく語られていたようなことであったが、それをルスティケッロが大いに潤色し騎士物語に仕立て上げたと思える (Orlandini pp. 9-10)。これに対してガッロは、多分今もどこかにマルコが書いた大汗への報告が残っており、それはマルコの考えを伝えるに理想的なものであろうとのベネデットの説 (Benedetto p. lxxv) を受け、ヴェネト語で書かれていたであろうその草稿こそがオリジナル・テキストと呼ばれるべきもの (第一次ヴェネツィア版) であり、それはまたラムージョ版 R とセラダ稿本 Z の祖本であったろうとする。一方、F に代表されるフランス語版はルスティケッロによるその一翻訳 (ジェノヴァ版) にすぎず、すでに改編・省略された形を示し、その性格もオリジナル・テキストが科学的なものだったのが文学的なものになってしまっており、このため後に F と Z の二つの系統の写本が生じ、今に伝わるのは後者つまり F だけであり、前者つまりマルコの草稿は失われたが、R と Z の中に残っており、F になく R と Z にのみ見られる記事があるのはそのためである。一方獄から解放後マルコによって追加・訂正を加えられたヴェネツィア版 (第二次) から宗教人のためにラテン語に訳されたのがピピーノ版であり、したがってルスティケッロのとは別の翻訳であると考え (Gallo pp. 135-7)。この説をさらに推し進めたのがボルランディで、マルコがいつの日か再び東方に戻ってくるためのために、あるいは他のヨーロッパ商人のために、後のペゴロッチの書のような東方交易案内としてもっぱら商業目的のために用意していた自筆稿が存在し、それこそをオリジナル・テキストと呼ぶべきであるが今だに発見されず、一方それに基づいて王侯貴族向けの読み物としてクビライの宮廷を中心とする騎士物語に仕立て上げたのが宮廷作家ルスティケッロで、今に伝わっているのは後者のみであると考え (Borlandi pp. 133-6)。しかもその草稿をマルコは、前註 40 のごとく 1296 年商人仲間の長として再び東方貿易に乗り出してライアス沖で捕まった際、“マニュアル” (東方交易案内) として船中に携えていたためそのままジェノヴァの獄に持っていく結果になったのであり、わざわざヴェネツィアから取り寄せたのではないとする。それをたまたま読んで興味を惹かれて物語に仕上げたのがルスティケッロであり、もしマルコがその草稿を最初から携えていなければかの書の成立もな

かったであろう、というわけである (Borlandi p. 135)。このように、最初はマルコの商業用の自筆稿とルスティケッロの物語訳という全く性格の異なる二つの原写本が存在していた傍証として、Meo Ceffoni によって紹介された、マルコの手がリアルト橋に鎖で繋がれて市民の閲覧に供されていたというエピソード (この場合は前者) や、コルディエによって紹介された、当時のヴェネツィアの総督 Marino Faliero の部屋に二種類のマルコの写本が所蔵されていたという記録 (1351年: Yule pp. 79-80) を挙げている (Borlandi pp. 130-2)。

またその成立のイニシアティブについても、自分の旅行記を世に出すためマルコの方からルスティケッロを利用したとする見方から、その旅と経験談に興味を惹かれたルスティケッロがマルコに執筆許可を求めたとする見方まで、重点の置き方に違いが見られる。まずオルランディーニは、財産をめぐる争いの記録に窺われるその強欲な性格から推して、獄中で栄光の虚栄心に掻きたてられたマルコが自らの旅の経験を世に出すことを企てたものであろうという (Orlandini pp. 20-21)。これに対してベネデットは、何か偉大なものを探求して彷徨う騎士のように自分を感じていたマルコが編者として騎士物語作家を選んだのであり、ルスティケッロが聖杯探求ものに典型的な語句をちりばめるのを許したのもそのためである、とあくまでマルコの主体性を強調する。一方ガッロは、なんらかの形でマルコの旅行やメモのことを聞き知ったルスティケッロが、マルコにその翻訳許可を求めたのであろうとする (Gallo p. 131)。ベルトルツィ・ピッツオルツィは逆に、それまでの不完全で断片的な東方紹介に不満だったマルコが、獄中でのルスティケッロとの出会いを自分の旅行記を世に出すいい機会として捉えたと見る (なお彼は、そのメモは東方貿易のための家伝として代々伝えられていたものであり、父と叔父が二回目の旅行の時のために用意しておいたものが役に立ったと考える: Bertoluzzi Pizzorusso pp. ix-xiii)。

個人的な印象を許されるならば、テキスト研究におけるその圧倒的な功績は誰しも認めるところであるが、ベネデットには晩年とみにマルコ・ポーロの偉大化・美化が甚だしく、その人と書の位置付けとなると、何よりも一介の商人や商業案内とみなすことを嫌い、科学者・文学者・冒険家はてはダンテやトマス・アキナスに並ぶ偉大な思想家に仕立て上げずにはおかない。例えば彼によれば、『驚異の書』は「中世が我々に残した最も力強い総合の一つ、そこに神学的・哲学的中世が要約されている二つの名高い総合、聖トマス・アキナスの『大全』や『神曲』と並ぶべき世俗的・地上的総合である。その偉大

さは別の性質のものであるが、それらに劣らぬ偉大な総合」である (Benedetto p. 78)。これに対してはさすがに、「それらよりは、もちろん、はるかに不完全な総合であるが、未来に向かってすっかり開かれている」と、ソルミがやんわりとたしなめている (Solmi p. xx1)。そうした位置付けや評価はともかくとしても、その書の成立の経緯や性格に関するかぎりベネデットよりガッロやボルランディの説の方が、マルコの行動 (帰国時 41 歳でありそのまま引退したとは考えにくい)、その書の複合的性格 (文体も内容も余りにもアンバランスである)、F 系と Z 系の稿本の大きな異なり、またジェノヴァの獄でようやく編まれただけで旅行中やヴェネツィアでは何も書かなかったのか、未完のまま終わっているのは何故か、といった様々な事情や疑問を説明するにはより現実的で説得力があるのではあるまいか。なお一般的に、歴史・地理のみならず民族学・人類学・民俗学等の調査・研究が進むにつれ、またユーラシア大陸内の往来・通信が頻繁になって情報が行き渡り、ヨーロッパにおけるアジア研究が飛躍的な発展を遂げるにつれ、つまりもはやポーロを通してアジアを知る必要がなくなるにつれ、ヨーロッパの研究は、クラブロートからユールに至る前世紀の著名な東洋学者たちによる注釈研究から (最近の注釈研究では、Bertoluzzi Pizzorusso 版に付されたカルドーナのものが最も詳しい : G. Cardona, *Indice ragionato*', pp. 489-764)、近年はとりわけベデット以来何よりもまずオリジナルの確定が必要との認識から、テキストそのものの研究が中心となってきているが、その時、マルコをあたかも独りその偉業を成し遂げた英雄のごとく扱うのではなく、その旅と書を成立せしめた時代と環境のなかで捉えようとする姿勢が注目され、その中でとりわけルスティケッロとの関係、特にかの書の成立の経緯におけるその役割が問題にされるようになってきている。いずれにせよ、いかにマルコの旅が偉大であれ、実際問題としてルスティケッロなくしてはかの書の成立もその成功もなかったのではあるまいか。

43) ラムージョは、自分の用いたピピーノ版とギジ家写本がラテン語であったところから、オリジナルもマルコによって直接ラテン語で書かれたと信じているが (ラムージョが用いた五種の写本のうち、ルスティケッロの名は唯一 V にしか登場しない : Benedetto p. 66)、一般にはヴェネト方言 (あるいはリングアフランカや現地語によってパリ国立図書館写本 F に見られるごときイタリア語がかつた中世フランス語で書かれたものとされている (Benedetto pp. xiii-xix 他)。ここに言う「さるジェノヴァ貴人」とは、メローリアの海戦 (1284.8.6, ピーサ人捕虜の開放は 1300 年) で捕えられ、獄にあったピーサのルスティケッロを誤ったものと考えられる。他にこのような協力者がいたとする説 (岩

村 pp. 140-1, 209) は、その可能性が全くなかったとしないが、一般には採られていない。ゾルジはしかし、マルコがヴェネツィアでよりもジェノヴァで歓迎されるのもありえないことではないとし、この「貴人」とはマルコが帰国途次タブリースあたりで識り合ったシェノヴァ商人で、そのつてにより獄での優遇やルスティケッロとの協同編集が許された可能性も考えられるとする (Zorzi pp. 318-21)。また、解放後ヴェネツィアでマルコ自身よってラテン語版が作られたとの説もあるが、これも受け容れられていない (Benedetto²は Roberto Cessi のこの説'L'opera di Marco Polo', 1929 に対する反論)。なお、ジェノヴァ人は俗語で書くことを知らずすべてラテン語によった、というのももちろん事実ではありえない。

44) 「イタリア中でそれが一杯になった」というのもラムージョの誇張だが、すぐに写本が出回ったことは確認されている。今に約 200 の稿本が伝わる (リストは Yule, Moule, Benedetto) が、同時代の『神曲』や後のマンデヴィルと比べるとずっと少ない。

45) ラムージョ版マルコ・ポーロは、ベネデットによれば基本的にはピピーノ版 P で、それをここに言う「驚くべき古い時代」のギジ家写本 (Z 系) によって大幅に修正・増補してより優れたものにした。その他いずれも Z と深い関係を持つ、現 F に先立つ一本のラテン語訳からのヴェネト語訳写本 V、同じく F に先立つ一本からのラテン語要約 L、そしてやはり F に近い一本からのヴェネト語訳 VB の三種類が使われているが、最も崩れたテキストである VB を無批判に用いたため害なわれた部分が多いという (Benedetto pp. clviii-cc)。ギジ家はヴェネツィアでも最も古い貴族の一つで、ポーロ家ともおそらく東方貿易で関係があり、したがってその写本は後に購入されたのではなく、最初からあったものと見られる (Gallo p. 140)。

なお、ラムージョ版ではこうしたテキスト研究上重要な箇所が第二版以降で削除されているが、単に出版の都合上、読者にあまり私的な印象を与えて売れ行きが落ちることを心配し、編集方針や動機、時間的關係が分かるような箇所を省いたものであり、使用写本に係わる問題はないものとみられている。

46) ニコロとマッテオが金銭を以てマルコを解放しようとした記録は残っていないが、当時身代金による解放は普通のことであり、考えられないことではない (前註 41 参照)。

47) ニコロ (?-1300 以前) には四人の子が確認されており、長男がマルコだが母親の名は伝わらず、1269 年ニコロが第一回旅行から帰国したときにはすでに死亡していた。二番目がマッテオ Matteo、同帰国時再婚したフィオルダリーゼ・トレヴィザン Fiordarise

Trevisan (1300 年以前に死亡) を母として生まれた。したがって生年は 1270-72 と考えられ、1310 以前に死亡している。これに対してガッロは、マッテオが 1300 年にすでに結婚して (妻カテリーナ・サグレド Caterina Sagredo)、フィオルダリーゼ Fiordarise とパスクァ Pasqua の二人の娘があったばかりでなく、1295 年には大議會議員に選ばれているところから、年齢的にみてその生を父ニコロの第一回旅行以前と見る (Gallo p. 316)。他に二人、ステーファノ Stefano (?-1331) とジョヴァンニーノ Giovannino (?-1318, タナからの帰途難破して死亡) なる庶子があり、母親の名はマリーア Maria (人種不明)。彼ら二人は 1310 年の叔父マッテオの遺言状証人として名の上げられているところから、すでに成年に達していなければならず、とすると第二回東方旅行中 (おそらく中国滞在中) にもうけ、連れ帰ったものと考えられる (彼らの母親 Maria の名も同遺言状にみえ、200 リラの遺贈を受けている (Moule p. 531) ところから、同年なお生存し、共に住んでいたことが知られる)。なお叔父マッテオには、マルタ Marta なる妻があったが (結婚時期不明、いずれも 1310 以前に死亡)、子供はなく、ジウリアーナ Giuliana とクララ Clara の二人を養女とし、彼女らは後にサンタ・マリーア・マツアルボ S. Maria Mazzarbo の修道女となった (以下、家系に関する註は主 Orlandini, Moule, Gallo による)。なおついでながら、ここでラムージョ自身が、「結婚後四年のうち」とか「その後数年ならずして」と言っていることから、マルコがジェノヴァに捕えられたのを、解放される一年前の 1298 年のクルツォラ海戦とするよりも、それ以前と考えるほうが妥当となる。

48) 妻の名はドナータ・バドエル Donata Badoer (結婚時期は不明だが解放後程なく、恐らく 1300 年。死亡は 1333-36 年。Badoer は貴族の家系。1301.6.14 の Baiamonte Tiepolo の謀反にドナータの兄弟 Pietro と Angelo も加わり、追放に処せられたことが記録にみえる : Zorzi pp. 336-8)。三人の娘があり、長女ファンティーナ Fantina、次女ベッレラ Bellera、三女モレータ Moreta。ファンティーナはマルコ・ブラガディン Marco Bragadin に、ベッレラはベルトッチョ・クエリーニ Bertuccio Querini に、モレータは父の死後ラヌッチョ・ドルフィン Ranuccio Dolfin に、次いでトンマーズ・グラデニーゴ Tommaso Gradenigo に嫁いだ。いずれも貴族の家系。

49) ニコロの死は 1300.8.31 以前。その墓 (家族全員の遺骸を取める大きな石棺で、後にマルコもそこに埋葬。同様の石棺の写真が Zorzi p. 27 に掲げられている) は、ここに述べられているとおりであったことが、マルコ・バルバロ Marco Barbaro (1511-70) や

フランチェスコ・サンソヴィーノ Francesco Sansovino (1521 -86) ら当時のヴェツィア年代記史家の文献にも記録されている (碑文は 'Sepultura Domini Nicolai Paulo De Contrata S. Ioannis Grisostemi' : Gallo p. 117. 異文あり)。その後、1592年に始まった同教会 (ベネディクト派尼僧院) の改築により、隣接するサン・セバスティアーノ San Sebastiano 教会に移管され、ずっとそこに在ったことが 1796 年まで確認されている。そして 1828 年に同教会が取り壊された時、いずこかに移されたと考えられる。1907 年と 1924 年にその墓の探索が試みられたが何も発掘されなかったとのことで、調査にあたったガッロは、「遺骨がどこか他の場所、おそらくはサン・アリアーノ San Ariano 島の納骨堂に移された後、石棺は建築材料として使われたのであろう」と結論している。なおサン・ロレンツォ教会はイタリア統一後、産業館次いで貧民救済院として使われ、今は養老院となっているとのこと (Gallo pp. 116-25)。

50) 家紋には、その形・色・模様・鳥の種類と数にいくつかのヴァリエーションがあり、ポーロ家のがラムージョの言うとおりのものであったかは確認されない (Yule pp. 7-8, Moule p. 21)。また、後に家紋を変えたとも言われる。<ポーラ pola> (コクマルカラス、ミヤマカラス等小さな種類のカラス) はヴェネト方言だが、ダンテに登場することが知られる: 「天堂の無数の光輝く霊たちは…'その生来の習性ゆえカラスたちが、夜が明け初めるや、冷えた羽を温めんと群れ飛び、やがてそのうち何羽かは飛び発って帰らず、他の何羽かは飛び発ったところに戻り来、また何羽かは同じ所をぐるぐる飛び回るように'…群れ降り来たった」(天国篇・第 20 歌・31-40)。ここではカラスは、天国の霊のこうした動作の喩えとして使われているだけで、特に関係する寓意はない。

51) 前註 37 参照。

52) 三人の父をアンドレーア Andrea、その住居をサン・フェリーチェ San Felice とする記録は今のところまだ発見されていない。したがってラムージョがどんな古文書によったか不明。ポーロ家については、かつてはヴェツィアの編年史家マリン・サヌード Marin Sanudo il Giovane (1466-1533) やマルコ・バルバロの文献に基づき、ダルマチア Darmacia のセベニコ Sebenico 出身で 11 世紀にヴェネツィアに移住してきたとする説が有力だったが (Bartoli p. 3; Allulli p. ix 他)、その後ヴェツィア及びヴェネト地方各地に古くからポーロ姓の存在が確認され、そのいずれと関係あるかは確定されない (Orlandini pp. 1-2, Moule pp. 15-21)。その中では、Candia, S. Geremia, S. Gervasio, S. Severo 等が有力視される (Gallo pp. 65-86。ゾルジは、そのうちサン・ジェルヴァーシオ S. Gervasio を

最も有力と見る：Zorzi p. 13)。

53) 三人の出生は諸記録ではすべてマルコ、ニコロ、マッテオの順。もう一人末娘フローラ Flora のあったことが知られる (1301.12.1 の出産にあたっての娘アウリアの遺言状：Orlandini d. 3, pp. 23-5)。フローラは Zane 家に嫁ぎ、娘アウリア Auria をもうけている。なお、同遺言状に母フローラがサン・ジェルヴァーシオに土地を持っていると述べられていること、また 1140 年の同地の記録に同名の女性 Auria Polo が見えることなどが、同地を先祖の地として有力視する一つの根拠となっている (Gallo p. 78)。

老マルコの遺言状に、「かつてコンスタンチノーブルに、今はサン・セヴェーロ区に住む」とあることから、家は長くコンスタンチノーブルにあり、1280 年以前のある時点で (多分三兄弟の父の死により)、ヴェネツィアに移住したことになるが、それ以前 1261 年頃ラテン帝国崩壊の前後にはソルダイアに移っていた推定される。

54) 老マルコには 1280.8.27 付の遺言状のあるところかして、マルコが産まれた時にはまだ生存していたこと確認される。その老マルコの長男ニコロの子のマルコ (通称マルコリーノ Marcolino) と混同されたものか。老マルコの死は、サン・ジョバン・クリストモの家の購入を分担しているところから 1295 年以降 (ムールはこれを疑問視している：p. 15)、1300 年の若マッテオの遺言状にその名のないところからそれ以前と考えていたが、近年ガッロは、その死を 1305-1306 年とする新説を提出している (前註 39 参照)。マルコの実母がいつ死亡したかは記録にない。ユールに、ビピーノの記事に加えて、「ラムージョは、母はマルコの出産で死亡したとさらに詳しく述べている」とある (p. 37) が、この版にはそうした文は見当たらない。

55) 弟マッテオには、妻カテリーナ・サグレド Caterina Sagredo との間に娘フィオルダリーゼ Fiordarise、もう一人の女性 (名前不詳) との間に娘バスク Pasqua (庶子) がある。ステーファノには息子ヤコベッロ Iacobello、娘イザベッタ Isabetta、息子アンドレーア Andrea、他に二人の子供がある。ジョヴァンニーノに子供があったか否か不明。

56) アーズ・トレヴィザン Azo Trevisan に嫁いだマリーア Maria は、ラムージョの言うごとくマルコの弟マッテオの娘ではなく、老マルコの孫マルコ (マルコリーノ) の息子マッフィオの娘。またそこから出自したドメニコ・トレヴィザン Domenico Trevisan は、アーズ・トレヴィザンと最初の妻 (氏名不詳) から出た子孫 (三代後)。その子が、ラムージョの執筆当時の総督マルカントーニオ・トレヴィザン Marcantonio Trevisan (在位 1553.6.4 - 1554.5.31)。マリーアとの間に子供はなかった。そのマリーアの嫁いだのが言

うごとく 1417 年であったか、父と兄弟の財産を全部相続したかは不明。

57) カ・ポーロ三兄弟のうちニコロの家系は、嫡子のマルコにもマッテオにも男の子がなかったため男系は絶え、長女ファンティーナの嫁いだブラガディン家に移る（その結婚により男六人、女二人が生まれる）。他の庶子の子孫については不明。叔父マッテオには子供がなく、一方老マルコにはニコロ、マロカ Maroca、アントーニオ（庶子）の三人の子（Orlandini, Moule よればもう一人アニエジーナ Agnesina）があった。その長男ニコロの子が前述マルコリーノであり（Orlandini によればもう一人フェリーチェ Felice）があり、それが長男）、ここにラムージョが 1417 年に死亡したというのは、マルコの弟マッテオの子ではなく、そのマルコリーノの子マッテオの息子マルコのこと（1411 年ヴェローナ城代。Marin Sanudo の『総督たち生涯』による。ただし死亡は 1418 年）。家系図は Moule, Gallo にみられる。細部の若干の違いについては Gallo pp. 83-5 に解説がある。

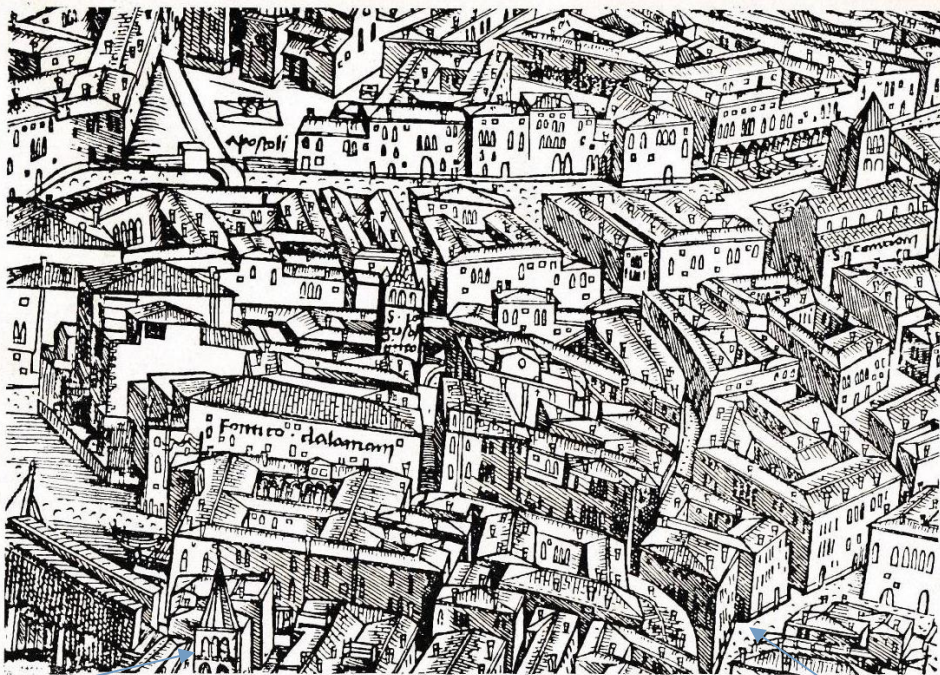
58) ラムージョが参照したギジ家写本の序文を指すものと考えられる（前註 45、資料 2 参照）。

59) 資料 3 参照。

60) コルテスは、「ヌオーヴァ・エスパーニアに関する第二の報告」のみが収録され、「第一の報告は、我々が熱心に探し求めたが、今日に至るまで発見できなかった」と註記されている（Milanesi, vol. 6, pp. 15-303. 前註 11 参照）。ピサロは、その遠征隊に参加した隊員による報告記が三篇収録されている（ibid., pp. 661-875）。コロンブスの航海記は見当たらず、ラムージョは何としても取めたかったのであろうが、スペイン当局が秘匿したため手に入らなかったものと想像される。



図1 マルコ・ポーロ像（ファルネーゼ宮）



①

SAN GIOVANNI GRISOSTOMO NEL 1500 CON LE CASE DEI POLO
(Dalla pianta di Venezia del de Barbari)

②

図2 ①サン・ジョバンニ・グリソストモ教会、②カ・ポーロ（1500年）

R. Gallo, 'Marco Polo, la sua famiglia e il suo libro',

Nel VII Centenario della Nascita di Marco Polo, Tav. I.

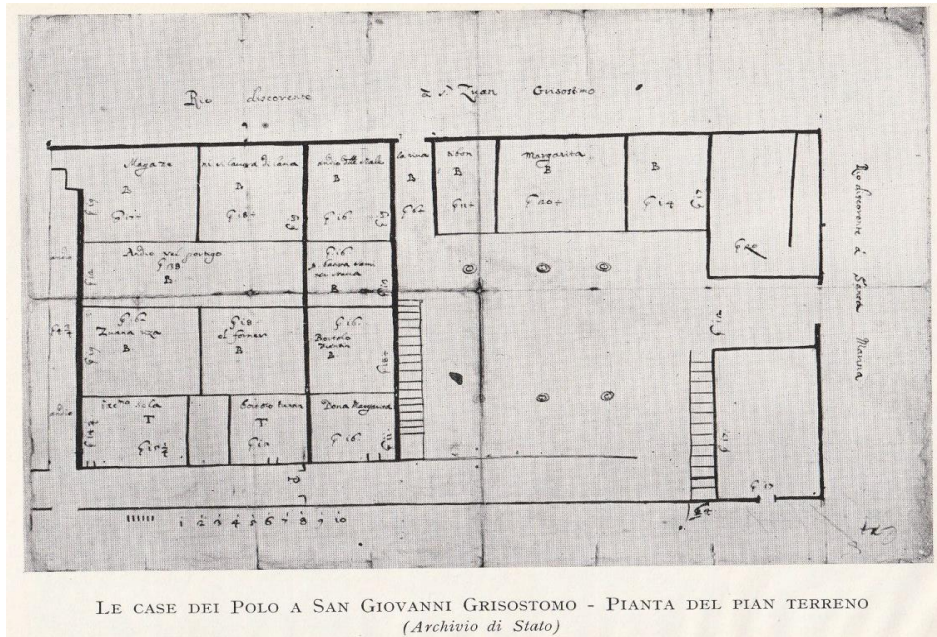


図3 カ・ポーロ、1階見取り図 (Ibid., Tav. II)

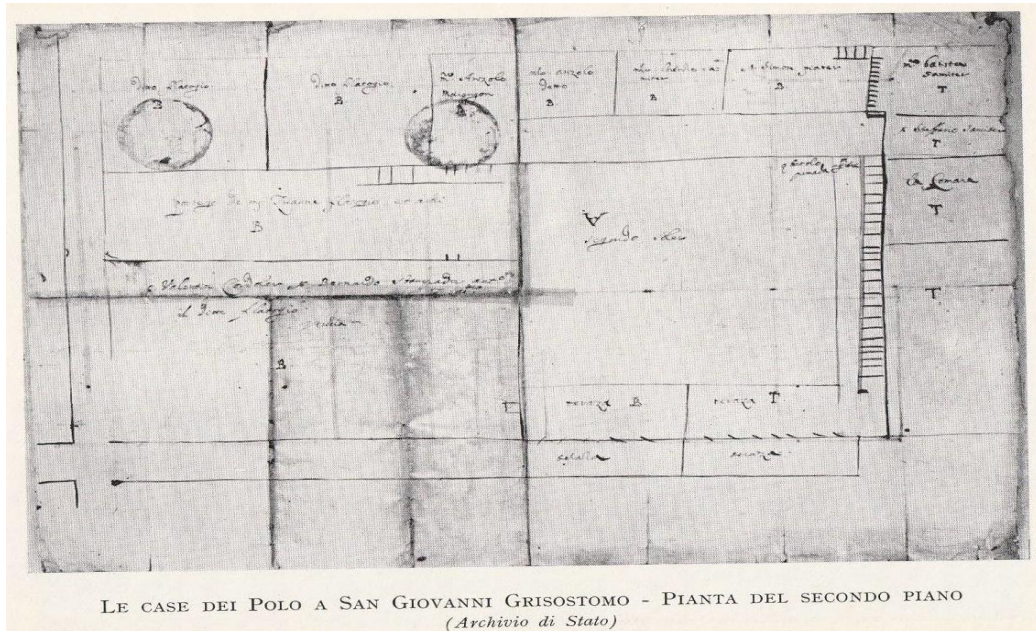


図4 カ・ポーロ、2階見取り図 (Ibid., Tav. III)

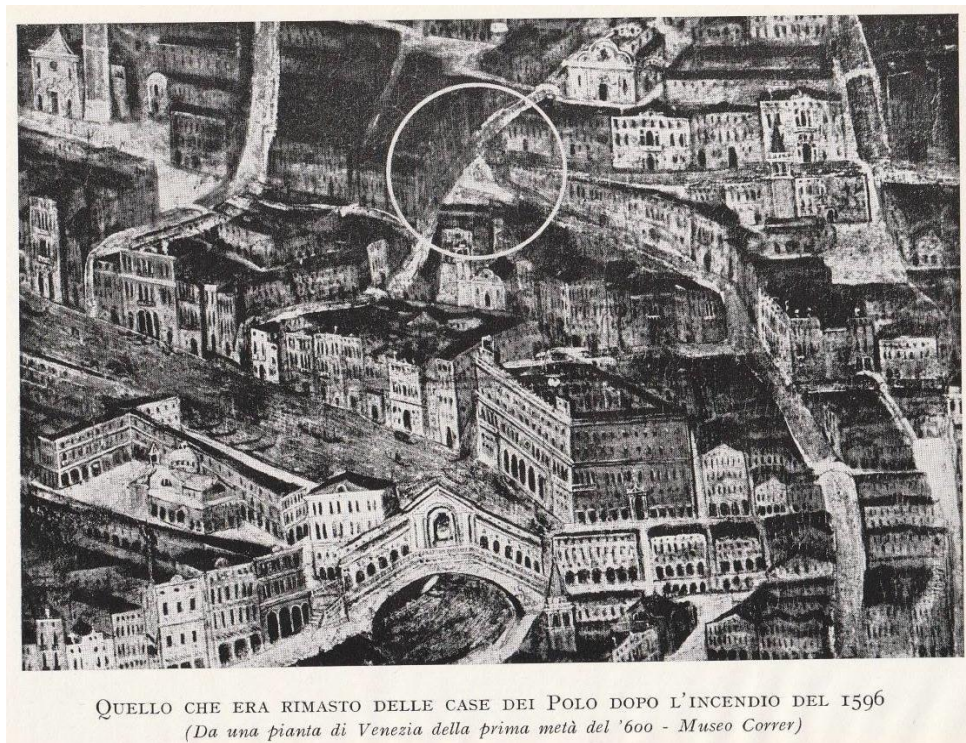


図 5 1596年の火災後のポーロの家（円内）、1600年代始め (*Ibid.*, Tav. IV)

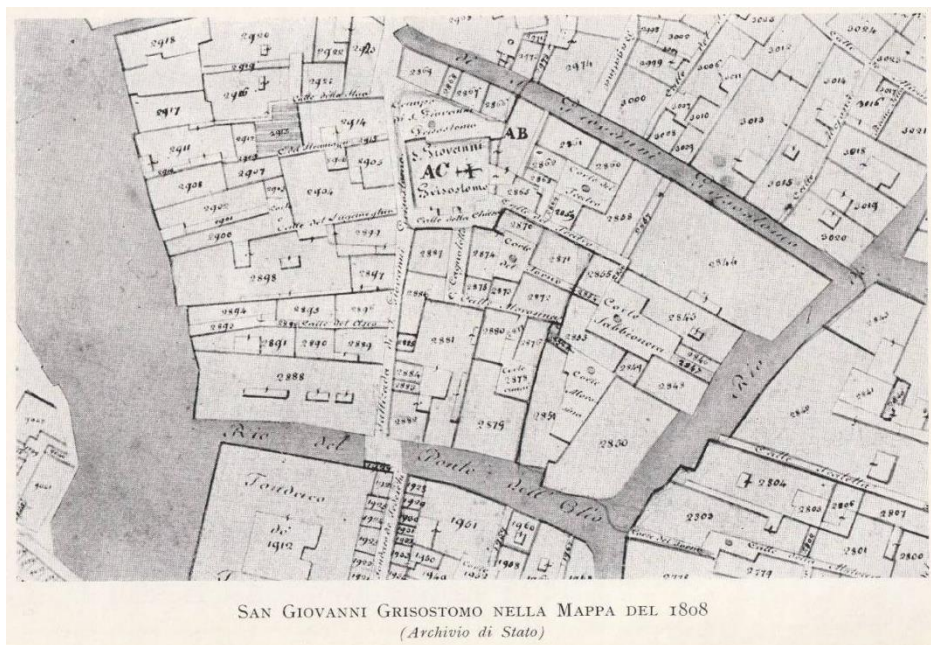
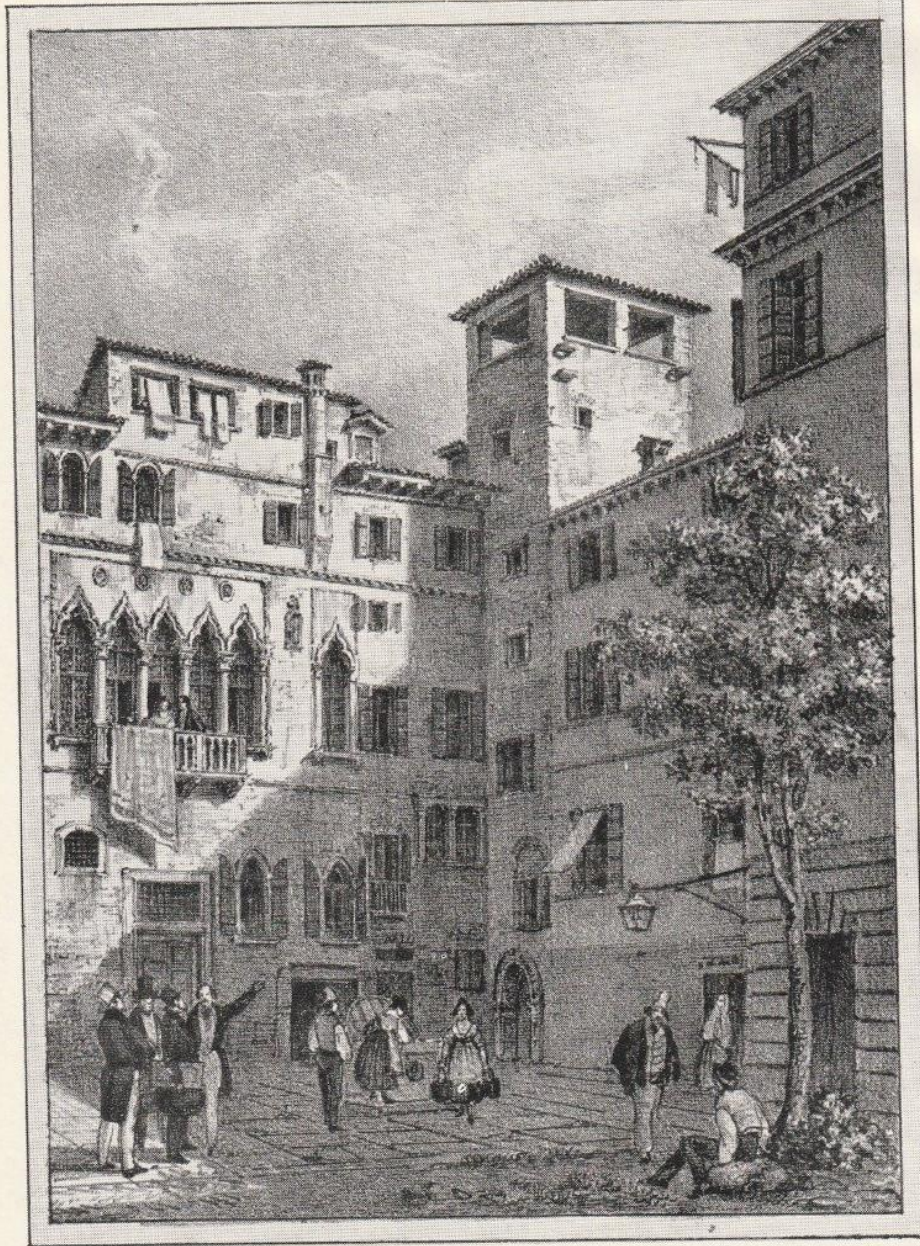


図 6 サン・ジョバンニ・グリソストモ区、1808年 (*Ibid.*, Tav. V)



CORTE SABIONERA VERSO LA METÀ DELL'800 CON LA TORRE
CHE APPARTENEVA ALLE CASE DEI POLO
(Da una litografia del Pividor)

図7 コルテ・サビオネラ（カ・ポーロの中庭）、1800年代中頃（*Ibid.*, Tav. VI）

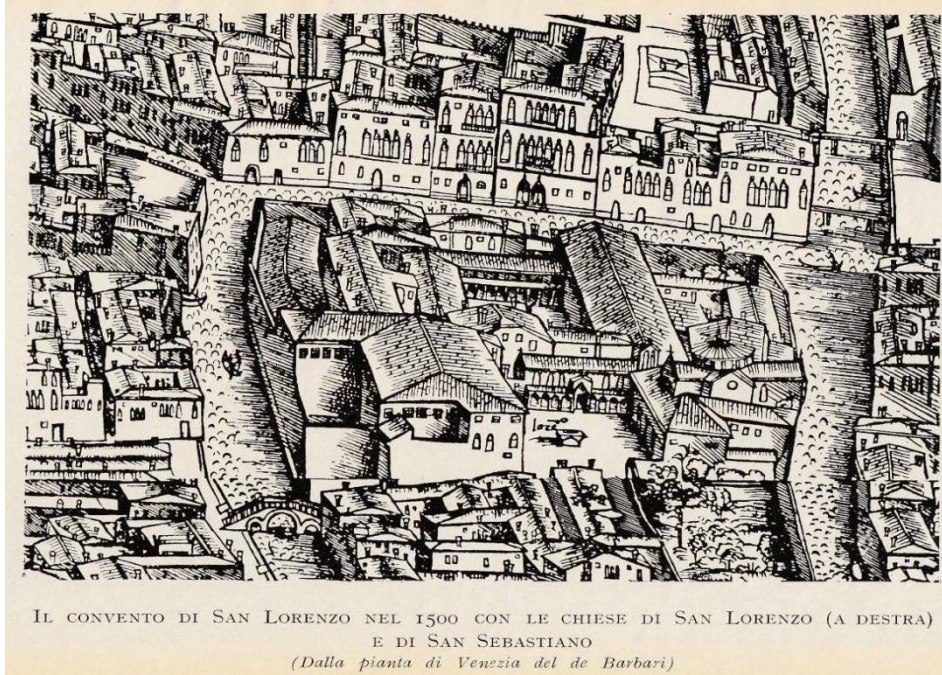


図 8 サン・ロレンツォ教会、1500年 (*Ibid.*, Tav. VII)



図 9 同、1800年代始め (*Ibid.*, Tav. VIII)

THE FAMILY OF POLO OF SAN GIOVANNI GRISOSTOMO

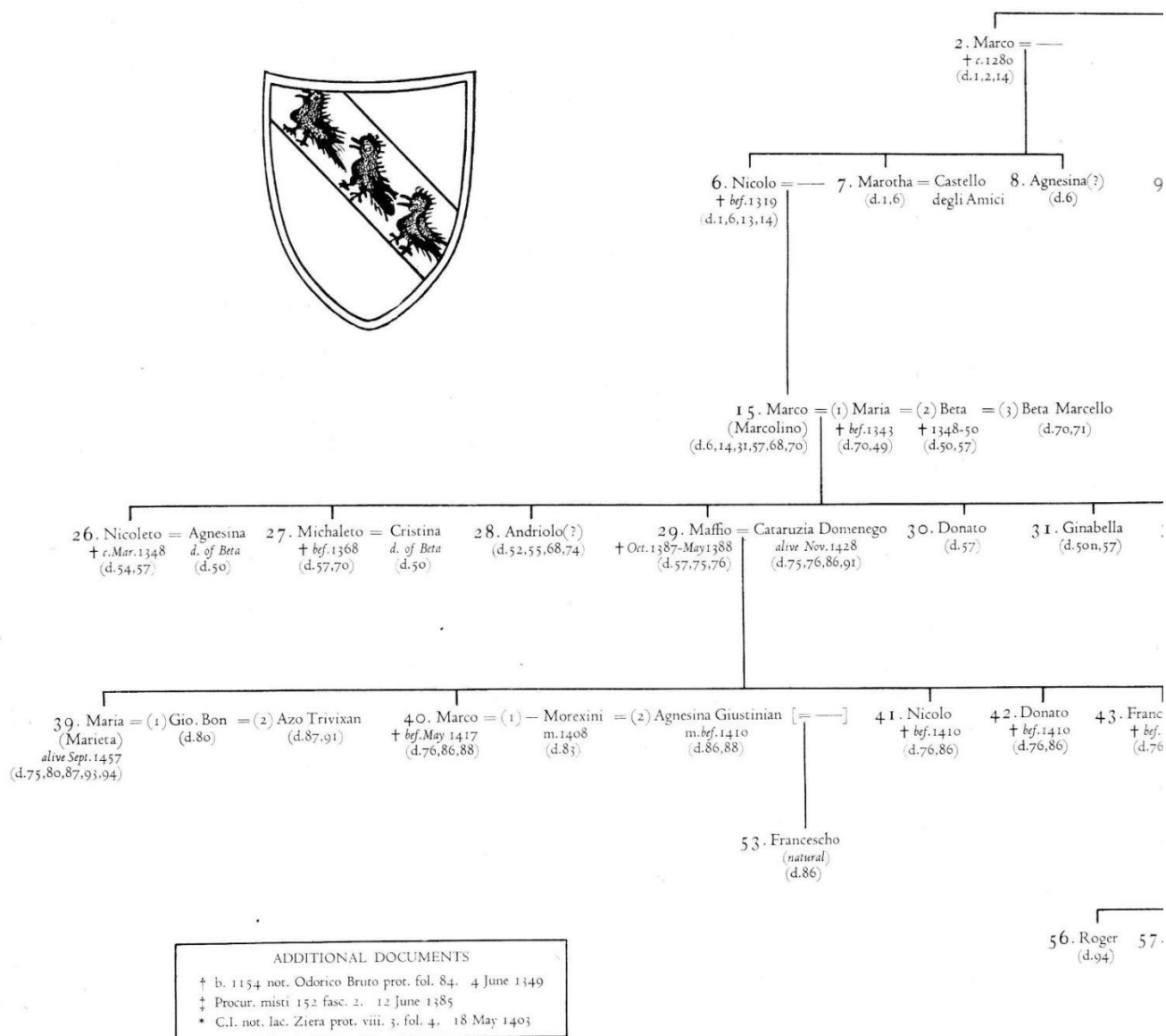


図 10 ポーロ家系図 (1) (Moule 1938 より)

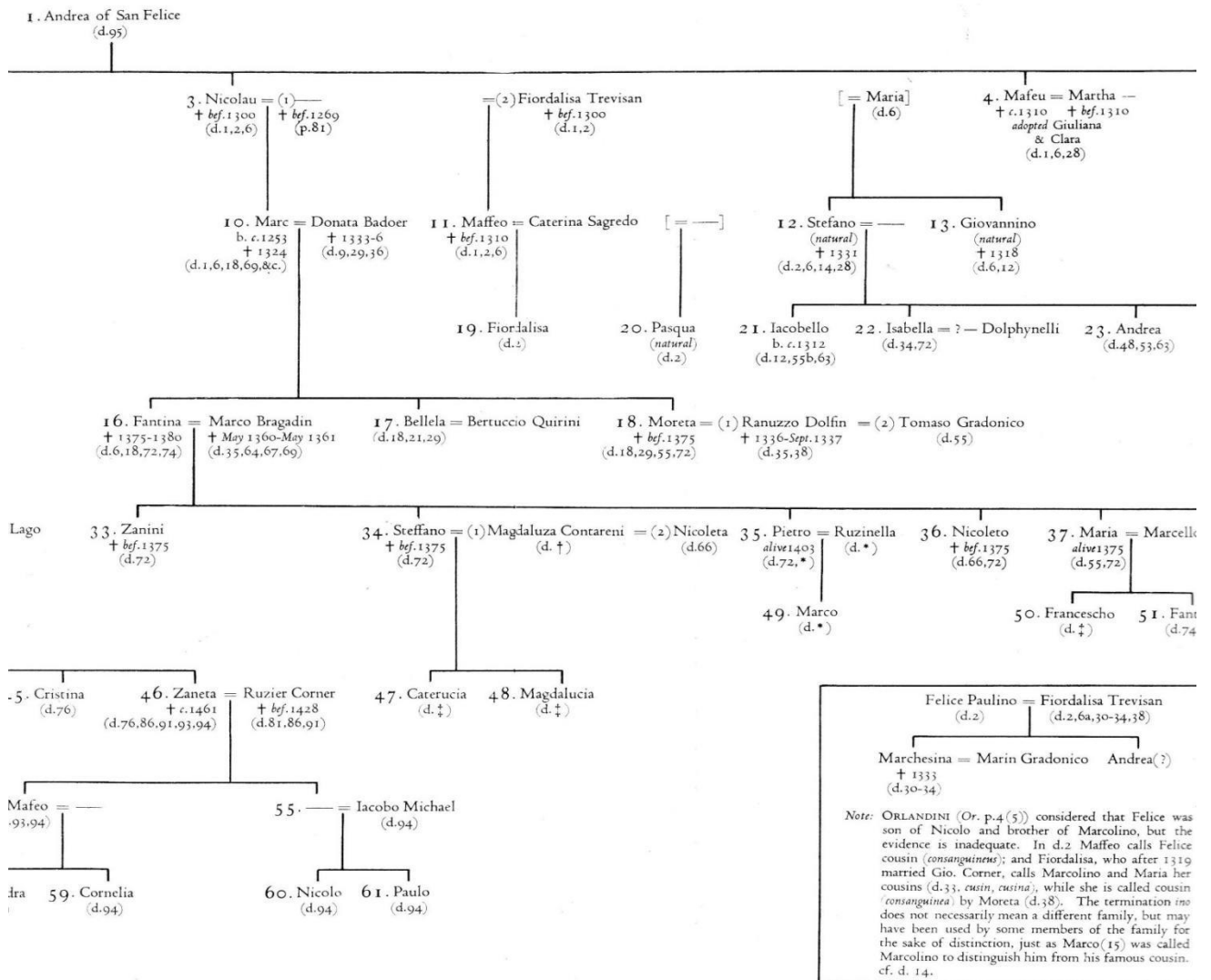


图 11 ポーロ家系図 (2) (Moule 1938 より)